

令和 3 年 6 月 11 日現在

機関番号：33905

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K03298

研究課題名(和文) 楽園表象と身体実践からみる仏領ポリネシアの核実験後の地域再生プロジェクト

研究課題名(英文) Reorganization of Local Communities in Post-Nuclear French Polynesia: Focusing on Paradisiacal Representation and Bodily Practice

研究代表者

桑原 牧子 (Kawahara, Makiko)

金城学院大学・文学部・教授

研究者番号：20454332

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、フランスがフランス領ポリネシアで実施した核実験の人の生活への影響を研究するものである。核実験前に前進基地であったハオ環礁の環境汚染・健康被害と地域再生に向けた開発事業への住民の声を収集し、身体実践を参与観察した。そこでは、住民が核実験による環境・健康被害を抱えながら、地域再生を目指し開発事業に従事するのは、核実験以前の伝統的な生活ではなく、西欧の物資が入り、経済的に豊かであった核実験期の生活を取り戻すためであること、さらには、ハオ環礁住民であっても、個々の核実験の影響の受け方が異なることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

放射能被ばく被害の捉え方及び賠償交渉における立場の違いは、ネオコロニアルな政治やグローバル経済の地域ごとの波及度合いの違いにあると概括してしまうと、性別、年齢、民族、職業などが異なる人々の個々の経験や暮らしを等閑視することになる。本研究ではそれを避け、実験地及び軍事基地となった環礁への核実験の影響を、住民の身体実践に焦点を当て、島・環礁ごとに、さらには、個々の住民ごとにミクロに考察した。

研究成果の概要(英文)：This study examined the impact of a nuclear test conducted by France in French Polynesia on the residents of Hao atoll, a forward base during the nuclear tests. I interviewed the residents about the environmental pollution and health damage of the atoll and conducted participate-observation to research the development project for regional reconstruction. The research reveals that what they want to regain is not the traditional life before the nuclear tests, but economic wealth with Western European supplies which they enjoyed during the tests, although suffering environmental and health damage. It also indicates that each resident of the atoll was affected by nuclear tests differently.

研究分野：文化人類学

キーワード：フランス領ポリネシア 核実験 ハオ環礁 地域再生

### 1. 研究開始当初の背景

申請者は、これまでのタヒチのイレズミとトランスセクシュアリティの先行研究において、植民地主義的、西欧近代的、グローバルな支配を孕む楽園表象に対し、ポリネシア人は身体に変工を加えることで主体性を獲得すると論じてきた (Kuwahara 2005a, 2005b, 2014; 桑原、2017a, 2017b)。つまりポリネシア人は自らの意志で不可逆的な模様を身体に彫り、生得の性とは異なる性の身体へと変工することで外部支配や抑圧に抵抗してきた。しかしながら、イレズミの場合、彫師は欧米のタトゥーマシンやインクを使い、欧米や日本の模様をポリネシア模様に組み合わせる。トランスセクシュアリティの場合、男性の身体にホルモン摂取や豊胸手術や性適合手術を施し女性の身体に変える。西欧・グローバルな技術を用いての身体変工は、ポリネシア人が植民地支配や近代化、グローバル化を能動的に自らの身体に取り込む実践でもあった。本研究では、外部から身体に及ぶ影響である核実験に対して、ポリネシア人が主体性を奪回すべく、いかなる実践を試みてきたかを、先行研究に引き続き身体を中心に考察する。それによって、異なる立場にある(身体性を持つ)個々の人間に焦点を当てた研究となる。具体的には、汚染された土地と海で個々の住民はポリネシアの伝統的生活と生業を維持・回復するために何を行い、さらには、現金収入をもたらす、欧米近代的な生活を可能にする開発事業にいかに関与しているかを調べたいと考えた。

また、申請者は楽園表象とフェティシズムについての先行研究において、楽園表象の起源を初期西欧接触に見出し、皮膚(身体)上のフェティッシュな取り違えは他のモノの表層に移行し、そこに楽園表象が重ねられると論じた(桑原、2017a)。本研究では、景観をそのような取り違えられた身体の一例とみなし、核実験後、フランス及び領土政府のみならず、ポリネシア人が自らの島や環礁の景観に重ねてきた変工(創造・破壊・再生)を考察する。楽園表象は、温暖な気候、住民の人柄の良さや性的奔放さ、社会の「原始的」調和とともに、景観の美しさを包含する。「美しさ」という漠然とした価値だけではなく、タヒチの景観は特定の性質を持つが故に「楽園」と称されたと推測する。しかしながら、楽園表象についての文学の先行研究では、楽園表象はそれを生み出した西欧自らの文明批判であるとし、現実の景観との関係については論じられてはこなかった(Margueron 1989 など)。本研究では、景観人類学が提示する、外部者が政治経済的目的のもとに作り出す「外的景観」と現地で生活を営む人々が作り出す「内的景観」の概念(河合 2015)を援用しながら、まずはポリネシア人が「理想郷」として抱く内的景観を抽出した後、西欧の構築した楽園表象が外的景観としてポリネシア人の内的景観との間にいかなる齟齬や相克を生じさせてきたかを検証する。それとともに、外的景観と内的景観がいかに核実験と開発事業を通して変容したかも考察したいと考えた。

もう一点重要なのは放射線被ばくの問題である。広島・長崎・福島放射線被ばくについて自然科学系、社会科学系の研究が進み、さらには、海外の被害ではチェルノブイリ原発事故やマーシャル諸島の核実験による放射線被ばくについて、被ばく者の連携や生活に着目した社会学的、文化人類学的研究が蓄積されつつある(ペトリ ア、2016、中原、2012 など)。翻って、仏領ポリネシアの核実験被害については独立運動に連動した反核運動を俎上に載せた国際政治学的な研究は若干あるものの(Danielsson and Danielsson 1986, Maclellan and Chesneaux 1998、桑原、2014 など)、フランス政府が長年にわたり環境・健康被害の情報を非公開にし、さらに核実験施設の元労働者たちも被ばく体験や健康被害について口を閉ざしていたことから研究自体は少なく、ましてや核実験場近隣の島々の生活の変化を描き出す人類学での先行研究はほとんどない。核実験終了から20年が経過したが、放射線被ばくの問題・健康被害は解消するどころか、長期間を経て問題として顕在化する。本研究では、実験場に近いマンガレヴァ島とハオ環礁の住民個々の生活と地域再建への関与を人類学的調査で丹念に拾い上げることによって民族誌的一次資料を蓄積したいと考えた。以上が本研究開始当初の学術的背景である。

### 2. 研究の目的

申請者は、これまでのタヒチのイレズミとトランスセクシュアリティの研究において、植民地主義的、西欧近代的、グローバルな支配を内包する楽園表象に対してポリネシア人は身体に変工を加えることで主体性を獲得すると捉えてきた。本研究では、いかに核実験により奪われた主体性を仏領ポリネシアの人々が取り戻していくかを、環境・健康被害と地域再建に向けた開発事業への身体実践を人類学的に調査研究することで明らかにする。人々が核実験による環境・健康被害を抱えながら地域再建を目指して開発事業に従事するのには、西欧近代的な生活向上のためであるとともに、ポリネシア的な暮らしを取り戻すためでもある。本研究では楽園表象がこれら2つの目的に作用を及ぼし、島・環礁の景観を創造・破壊・再生させていることを提示する。

### 3. 研究の方法

本研究において、参与観察と聞き取りを主とする文化人類学的調査方法を用いて、仏領ポリネシアのツアモツ諸島ハオ環礁において実地調査を行い、被ばく被害、養魚の開発事業、生業や生活実践についての民族誌的一次資料を蓄積した。また、民族誌や考古学資料、核実験調査報告書

とそれに付随する地図や写真、核実験施設の元労働者が撮影した映像を収集・分析し、核実験と水産業開発によるハオ環礁の変化を考察した。被害者支援・反核団体との関係を築き、実地調査時のみならず、メールやSNSなどを使って連絡を取り、反核運動の動向を追った。

#### 4. 研究成果

2017年度から2019年度にかけての研究期間内で計3回仏領ポリネシアでの人類学的調査を、ツアモツ諸島ハオ環礁、アマヌ環礁、タタコト環礁、プカルア環礁、レアオ環礁、ソサエティ諸島タヒチ島において行った(ハオ環礁では2回、東ツアモツのハオ以外の環礁では1回、タヒチ島では3回)。本研究当初は研究対象地として定めていたマンバレヴァ島は、2017年度8月~9月にかけて事前調査を実施したが、2016年度に事前調査をしていたハオ環礁と比較検討し、本研究ではハオ環礁を重点的に研究することにした。

ハオ環礁を重点的に研究調査することにした理由は、核実験期に前進基地であったことと、以下で述べるとおり養魚場プロジェクトの計画が進んでいる最中であったことと、筆者が環礁のコミュニティに入りやすく調査がスムーズに開始できたことによる。調査を進めるなかでハオにおいて最も問題であることが明らかになったのは、核実験が終了しフランス軍が撤退した後の基地経済に代わる事業としての養魚場プロジェクトであった。したがって、本研究ではそのプロジェクトを中心に調査した。同時に、核実験時のハオ環礁での暮らしについて聞き取り調査を行い、生活物資、インフラ、仕事などにみられる核実験期からの変化が現在の住民の暮らしにどのような影響を及ぼしているかを、参与観察を通して調査した。

本研究調査を通じて、ハオ環礁の住民が核実験による環境・健康被害を抱えながら、地域再建を目指し開発事業に従事するには、核実験以前の伝統的な生活ではなく、西欧の物資が入り、経済的に豊かであった核実験期の生活を取り戻すためであること、さらには、ハオ環礁住民であっても、個々の核実験の影響の受け取り方が異なることがわかった。また、同じ東ツアモツであってもハオ環礁周辺の環礁は核実験期の役割や受けた経済的影響の規模が異なり、住民の核実験期の経験や現在タヒチ本島で展開する反核運動への関わり方にも違いが現れることがわかった。

タヒチ本島においては核実験施設の元労働者支援団体 Moruroa e Tatau とポリネシア人の放射能被ばくによる健康被害への賠償を求める団体 L'Association 193 の活動について関係者に聞き取りをし、会合等に参加して調査を行った。Moruroa e Tatau が過去に実施したインタビュー資料の調査も実施できた。多くの文献資料も収集したため、今後、引き続き整理して分析する予定である。

#### 研究発表

##### [学会発表]

1. “Hope and anxiety: the fish farm project in Hao after the CEP.” European Society for Oceanists 2018 Conference, University of Cambridge. 2018年12月。
2. 「仏領ポリネシア核実験の元前進基地ハオにみる当事者性」放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究、国立民族学博物館。2019年1月
3. 「希望と不安 核実験後のツアモツ諸島ハオ環礁における養魚場プロジェクト」オセアニア学会関東例会 2019年1月
4. “Uncertainties in Estimating Health and Environmental Risks of Radioactive Contamination in Hao, French Polynesia after Nuclear Tests.” International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, Adam Mickiewicz University in Poznan. 2019年8月。

##### [図書]

1. 桑原牧子「何についての当事者か 仏領ポリネシア核実験の元前進基地ハオにみる当事者性」中原聖乃編『放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究」(出版交渉中)

#### 参考文献

- Danielsson, Bengt and Marie-Therese Danielsson. 1986. *Poisoned Reign: French Nuclear Colonialism in the Pacific*. Raingwood: Penguin.
- MacLellan, Nic and Jean Chesneaux. 1998. *After Moruroa: France in the South Pacific*. Melbourne: Ocean Press.
- Makiko Kuwahara 2005a. *Tattoo: An Anthropology*. Oxford: Berg.
- , 2005b. “Multiple Skins: Space, Time and Tattooing in Tahiti” In Anna Cole, Bronwen Douglas and Nicholas Thomas eds. *Tatau/Tattoo: Bodies, Art and Exchange in the Pacific and the West*. London: Reaktion. pp.171-190.
- , 2014. “Living as and Living with Mahu and Raerae: Geopolitics, Sex, and Gender in the Society Islands”. In Niko Besnier, Kalissa Alexeyeff eds. *Gender on the Edge: Transgender, Gay, and Other Pacific Islanders*. Honolulu: University of Hawai'i Press. pp. 93-114.
- Margueron, Daniel 1989. Tahiti dans toute sa littérature. Essai sur Tahiti et ses îles dans la littérature française de la découverte à nos jours. Paris: L'Harmattan.
- 河合洋尚編 2016 『景観人類学 身体・政治・マテリアリティ』時潮社。
- 桑原牧子 2017a 「皮膚をまさぐる視線 18、19世紀タヒチ社会における他者認識にみるフェ

- ティシズム」田中雅一編『フェティシズム研究第3巻 侵犯する身体』京都大学学術出版、pp. 49-74。
- , 2017b 「マフとラエラエの可視化と不可視化 フランス領ポリネシアにおける多様な性の共生」風間計博編『交錯と共生の人類学 オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』ナカニシヤ出版、pp.133-164。
- ペトリーナ、アドレアナ 2016 『曝された生 チェルノブイリ後の生物学的市民』人文書院。
- 中原 聖乃 2012 『放射能難民から生活圏再生へ マーシャルから福島への伝言』法律文化社。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 桑原牧子
2. 発表標題 「希望と不安 核実験後のツアモツ諸島八才環礁における養魚場プロジェクト」
3. 学会等名 オセアニア学会関東例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Makiko Kuwahara
2. 発表標題 “Uncertainties in Estimating Health and Environmental Risks of Radioactive Contamination in Hao, French Polynesia after Nuclear Tests”
3. 学会等名 International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, 2019 Congress. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 桑原牧子
2. 発表標題 「仏領ポリネシア核実験の元前進基地八才にみる当事者性」
3. 学会等名 放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究、国立民族学博物館
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Makiko Kuwahara
2. 発表標題 Hope and anxiety: the fish farm project in Hao after the CEP
3. 学会等名 European Society for Oceanists 2018 Conference, University of Cambridge (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 桑原牧子
2. 発表標題 「仏領ポリネシア核実験の元前進基地ハオにみる当事者性」
3. 学会等名 放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究、国立民族学博物館
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 桑原牧子
2. 発表標題 「希望と不安 核実験後のツアモツ諸島ハオ環礁における養魚場プロジェクト」
3. 学会等名 オセアニア学会関東例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関